

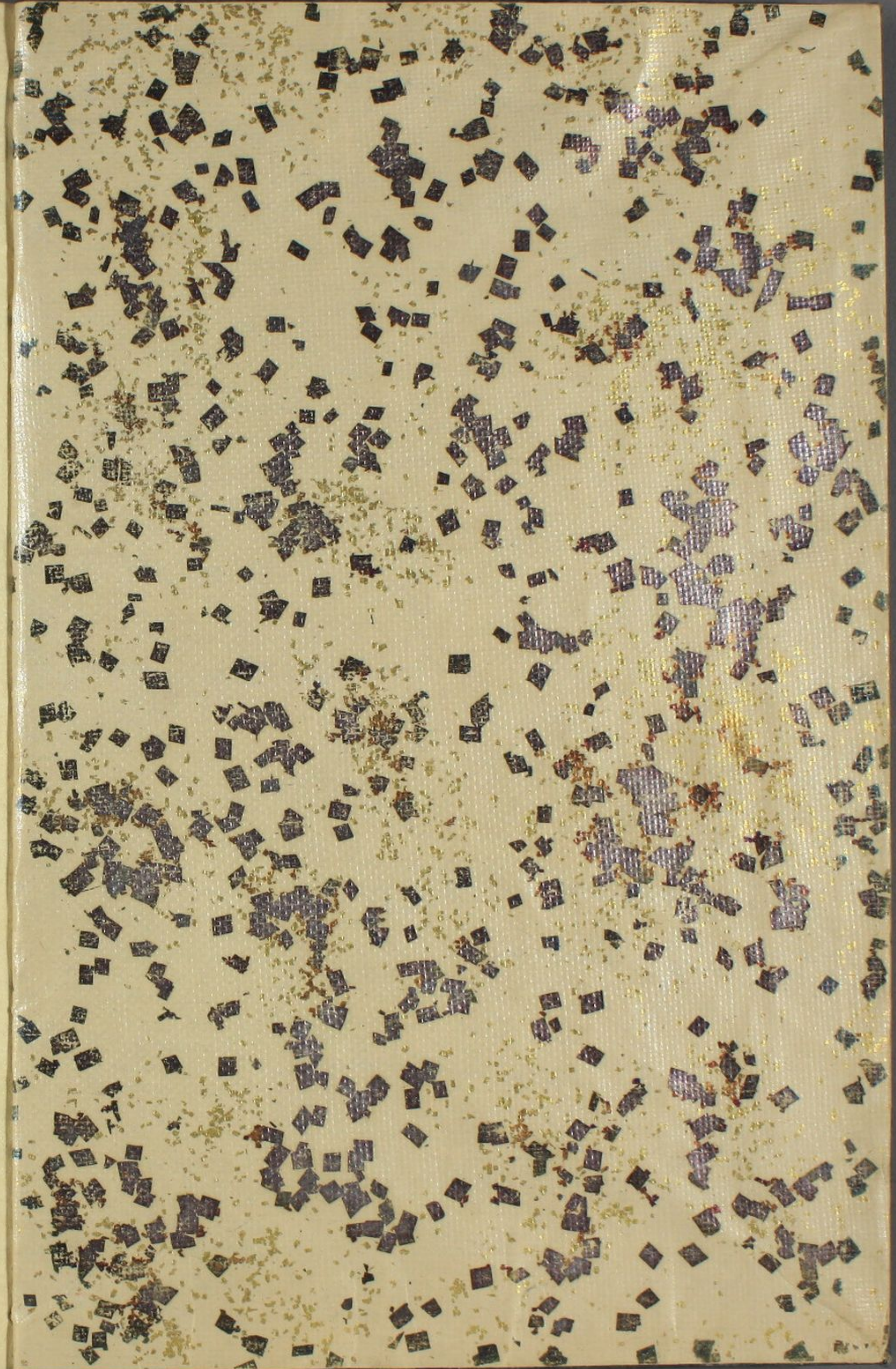


源氏辨了抄

十六



天
隱
車



早蕨

宇治茅四

心^ラ為^ラ卷^ル名^ト董^セ世^ニ歳^のま^乃子^{あり}

や^が一^のい^ま乃^光と^ん終^よつ^けて^も

^{河亭}日^乃光^藪一^わの^べ砥^上子^所里^も花^い咲^けり

世^よと^中の^りへ^き程^い限^りあ^らわ^がさ^りと^れい

室^枝云^世河^の無^常と^云昔^も死^べく^と人^せん^子

不^叶又^大君^と惜^じも^あい^さき^と也

君^子と^てあ^まの^まと^つ一^くい^常と^忘れ^ぬ初^蕨也 ^{阿闍梨}

^{善補集}都^もい^みら^べき^人も^あら^ぬの^と常^とあ^ひて^まや^まら^ぬ

中^納言^のの^かし^とば^よと^めて^んあ^らわ^る物^{あり}也

角経春よのくまがらまのうられやうにて
もんらわがまらまらとまうらま
めいあまらの人乃からいから後子

角経春よの君のい伴らる人のうらとま
あつらんとまらまらあつらまら

薰の伴乃人姫君の女房まら最むらとま
まのえんまら

正月廿一日也公る根源云内は
節會也仁壽殿まら約まら文人也
詩と作まらてい前まら後せらる保元
中納一後い絶まらまら

河海云五十二代嵯峨天皇弘仁三年に始まらま
人のいまらてえ神も志りまらまら

我がう愛世中とあつらまら人乃人まらまら
まらあまらまら

去のれ園へあまら梅花まらまら
まらまらまらまらまら

あまら胸のひまらまらまら
漸愧懺悔まら罪りまらまら

いまのまらりのまらまらまら
まらまら

河津傳入

新くもきくもみまゝ一人傳よる世の社乃呼子傳

けすい人傳りて来てもるよりの心家子

めいりし教と人傳りて切すを川へて人傳

りて中君よ一教あひ流ひしりかきり跡一

行よと足呼子身も一人傳りぬの心

今いひる地中人常よかすの心りて何れ心

もくそおられ け詞肝又也中君と我拙よせぬ

と常よくやしく心も我心もくも思ひりり

出来んと力とくりて流よ人毎よけを思志

て心と割すりて道理を以てすまきの教也

け伏見とあきりてんもりり 中君之

東下 けい家よわが世へるん常原や伏見の里れ荒れ

空枝云常原や伏見の里へ大和國添之郡也け

芥一二句と用りて計也けす家よ位りてきと

也南流、春よ布留の山里りりんと宇治の里

と布留山と志りて中より家も伏見と宇治

よ志りてあり也中流河津也

嶺の麓乃とつと足履んともとのつとふん

あゝれ旅ね

河言今 長き言と足控りて新なる花を記置に任やる

日中沈子孝世と事也とのがうらうらと須磨巻
も有り故つのみやとりも中君初とて生れひ
！とともりの言ひ焼てうらうら子居流ひの
バ今自家のうらうら旅のゆかりの足持え
ゆくいとのが孝世なれば尤也中君いさもある
と也

いづくも限りあり 大君十一月卒とて二月

三月二月にぬぎ流し也

限りありうらぬぎ持つな衣もくもれ抱い海たり

花のいもくもれもきいりり

古今十六

皆人の花の夜は成ぬ也若の袂よわらぬ

道昭

是も服夜とぬぎ帯の袷米子何うとせよ

花の夜とつり

不審抄出云花のいもくもれ除服のらあぐら抄

出流よべきうらひのらもゆらぎまも也

かゝるんせし障子の穴 推せ巻よありしゆ

妻やじりのせ

可六

月やあらぬ妻やじり一軒あらぬ我方ついであり

実枝云詞と信し斗とんえそれど下のら二

葉后と葉平れ昔よわらうらとるむとるむとるむとる

らありを五つらも葦も回一へ一へ

花の香もぬらうとの水白いも橋あふねど昔とさ
わらうつまで

河支今

五月まつ花橋の香とつげの昔の人代社のつぎ
ぬらうと葦也花の梅なれば橋あふねど昔とさ
ねこめうらふ宿やとあり

河後撰

垣がよ散ら花とつらうの根こめよ河のつぎ
いとよみえてのびつら命のつぎ

益田池 大和高市郡

益田池の根蓐乃つよよもゆらみのつぎ

まぐての世とつらうねとつぎ

河松送

まぐての世とつらうねとつぎの世とつらう
まぐてまぐてつらうとつらうまぐて

まぐての畢竟皆堂のねとつらうまぐて

勢とまぐての浦の川

花松送

清川そのの藻とつらうと成とつらうとつらうに流
いとつらう世とつらうとつらうとつらうとつらうとつらう
つらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらう

物とつらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらう
人皆つらうとつらうとつらうとつらうとつらうとつらう

金葉雜上

長谷川 誓のまじりていづるに神の浦もさ
仍覚えおかし長谷川すうとさきり辨尼の長生
すうがうらめきと也神乃浦の神也

三つうら海士の長よとされやうたう波よあらはれ
河後撰 ちうら海士の長よとされやうたう波よあらはれ
えはの世もえとたうら驚りもや也一はいん

河 君と我らうらうと驚らん昔の世もさきり
ありあれは娘もさ世にもあひらうと

河六帖 初つ頃をうら初瀬川娘も瀬にも流あやと
とのづらりのつごうでうら中よ 三棟屋棟也

河本 今の殿いじもさうらえはあうらをに殿作せり
おももひやとさくひらうとて

河 とうらとおももひや世中とありあづの我がとえ
とまてうや湖の水海濱よのまうら孫をあひみ

河万葉 級照也湖乃水海濱よまうら孫をあひみ
いかうとあさうと也舟より舟の真帆とつげり

仍覚え云級照とんは舟よ照日のあひやうらう
湖水の標名よ級照とん湖光とんも同也

白氏文集よ湖光とん也級照也行衆山とん
いさういそら方とんあり夕日のさき照ん

新編 寄水 五

於といふらん乃級照と枕詞をけりや
一級照やわの河敷波川に万葉よめり又
まがと真青と用ゆるりもあり式子肉親玉
乃をよ

湖海や雲乃うらな漕舟のまはるまのりや

何より宿の先いやこれい

花拾遺 後茅原ぬら宿乃梅花のやとくや月ならん

宿水 宇治茅五

寄水 文選

寄 東坡

以方為卷名蓋世よりせみ乃月まてし事
也并よりあつ移れ横置と魚より 椎本の末
蔵より角流よ八宮乃一周志のり又早蔵
蔵春 のりありて次の年 東屋巻よりつむり
熟よて前のりとりいせらり玉巻巻もをむ
襲て蔵の年よりのりとすて東の源氏たみの
年にあつらけ巻もを宿壺の女二宮のりとい
らんよて前よりのりとすらや 是け物終の
例也 仍巻院

その比叡壺とやゆらひ故に大匠の女御もあんな
まけらぬまじきまゝとやいふまゝ一時人よりまじ
まのり給ひまゝ

不審抄出まゝ梅が枝よたに臣の女と春交へと
あり一時逢はの明石中宮あり給ひまゝなりと
人のいふまゝとやいふれと給ひまゝと逢は
作られしと明石姫君より先よあまへまゝなり
麗景殿女御とやききそれより年経ては殿かたり
て今い叡壺とやまゝなりと家子人より先よ
あれい給ひまゝ

仍覚云新章卷より若菜上まぎのた大匠也今
上のた大匠は今とい梅枝巻よいえ服若菜下に
位よつせ新よ

女御夏の比 推本卷董世三の夏銅涼よ
宇治へ新給ひ時なり也

かまへの菊の山ういそとさうりちるは
秋とよそ時とありこれ菊たうらうふいあひの

つづよ田と送らばまゝさきよ
文集第十六曰送春唯有酒銷日不遇
先よい花つらさゆらまゝの給ひ守

たの女のみや

朗詠の下に

蘭得園中花養艶

請君許折一枝春

紀齊名

師云

宋女司の諸國よりまのすり宋女とけあま

あや國より美人或は詩や琴瑟をば子悦た

子女と天子よまのすり其國と名も保て近

江の宋女出羽宋女葛城宋女など愛の詩子

花と云美人よはと宋女司よあら美人と一夜許

これよ作より宗祇云是の存壺女御妻比ふせ給

ひ一年の秋乃のみ也菊総巻よはは太君とせ給

へり翌年ののみ也

あかりのまぶくさひまごめんとも

水波不通といふか文也堅密してすれがなま

実枝云をむめりさねとも下品のくまらふあれ

いさとまりとも白文よ合せんとも

あせらの大納言

红梅巻に按察大納言竹川巻

よ右大臣なれい今右府なれなりと乃呼付らるとい

へり红梅の右大臣也

あうらひの四方

菅吾部心宮の娘に宮の四方と

中父交うせ給ひて母松極よ具くは按察大

納言のりらすすむは按察大納言のりら

娘也白文らけ給ひ一人也江梅巻に按察大
納言の嫡子の太史がらふらりませうととんて
やまごといふ文の作られり

そのとら 薰世三の言也角流巻にあり

女二文も以服とて 薰世四の家也早蕨巻にあり

とら

びりありらん香のきりり 漢武帝李夫人と

とらして反魂香と焼く角流巻にもあり

た大匠れまらふにあらして八月がらりまて実けいり

不審抄出云夕香の六君と白文にありせ給ふべ

き定也け時優婆塞の宮中三年にあり早蕨

巻の八月にあり也

つやうらふ 聖徳記云重く一きり

安枝云らの動顛せぬ也

それといふてらあはと

仍え云薰のらまたのりびら成給へ

かひてうらうらうらうら

其のたうらうらうらうら

そのたうらうらうらうら

そのたうらうらうらうら

のこほもあつとれたのりげなくうぶぐしきり
ありぬへきまありー

研云 け洞肝文也白文の行跡とひて徳人のとくを
己人の恩とつけてそのゆいもおねい交と
まよひい人の慈切とる存と礼とのべ洞あり
つとへきまのく立法まなくあつらうの貴賤あま
益多く換あり

あつらま咲てとら

弄 權ハ帝も花のまわれやあつらま咲てうらひけり
奥入 譬日及之在條恒雖盡而不悟 注曰 朝菌者世謂

之木權或謂之日及 文選 歎逝賦

願云 藤ハ木權也とあり是ハ洞も咲て若もとやうむ
也牽牛これハ曉いりきて洞もとやうむ也若も
あまがかりと名付家よつらハ牽牛のゆ也此也

奥入のいほり石計

とみるゆりといんすだて

花 女郎花うとんつぞ新ら男山あしそらうとん
まひりけきさるや 花 引介未勸露の命乃らうま
きと何よけきさるやいふや家まの叶へー
秋のまの今すらうまあめのとぬきりゆら

朗詠 秋興

樂天

大底四時心惣苦

就中腸斷是秋天

庭をまがれも

里へ荒て人の古め宿かれや庭も離も秋の野路

世とまじき路ひー暖院

河海に暖院と栖霞寺秋桂院秋とありは後

ろれん大覚寺也けも暖院天皇み十の離宮りきまで

脱履の後兼和五十四元年に暖院にうつり後

と四史あり貞觀十八年五十六清和六代大底くげを

み奏し寺にあられ大覚寺と名たり暖院天皇

昇遐の後子階庭不披とひら墓も謝亦しよ壞こと四史あり

今六條院のゆみすなり

仍覺云暖院と五十三代淳和じゆんわ右后正子の奏

し寺とあり大覚寺と号せり花名の清和

と淳和と改てなり

毛詩云北堂ほくたう裁さい萱草せんそう能のう

忘憂わしゆこのゆへに萱草と忘草とよりしん古の岸の忘

草も萱草也今に神供をけまけりついで供

忘草わしゆの一名也又萱草と忘憂草とより

よ付て忘草とより何もお違ふこと也

世のうらやまのうらやま

^{古今}山里の世のうらやまのうらやま

仍覺云申君の山里のうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやま

世中又恒然の今と世のうらやまのうらやま

世は海りうらやまのうらやま

け世のあまりの程のうらやまのうらやま

うらやまのうらやま ^師不審抄出のうらやま

とあり推中卷蓋廿二の八月廿日ハ八文葉

御也廿三年ハ早蕨春ハあつらひけあつらひ

十六枚めれ例のうらやまのうらやま

物どもやあつらひけ例年九月ハ八海の料

製菓のうらやま九月のうらやま又末ハ九月廿余

月ハ蓋のうらやま八月のうらやま

奥子うらやま河内梨めり例のうらやま

佛と云例と信抄ハ角法のうらやま

大君ハ角法ハ十月ハうらやま

うらやまの別あつらひ右系のうらやま

一禪云うらやまのうらやま

らひとハうらやまのうらやま

禁中より殿上、別當いた大北也、万とれたり、
也、
其のまゝにまごさうにていとも、
三好い

大君の角流、卷子、蓋世、三の十一月、
早蕨、蓋世、二の二月、中君の姉の除服の

後して、より、す、二條院へ入、
八月、蓋い、あ、
つよ

つよ
つよ

つよ

世に、
海軍、
世に、

大元、
元元良、

大元、
今也、
余、

ひとり、
後撰、
十、

獨寝、
月、
月、

枕、
枕、

洞川、
水、
枕、

や、
や、
や、

す、
す、
す、

大和、
物、
信、
文、
級、
と、
よ、
あ、
よ、
り、
い、
ま、
て、
親、

よ、
ま、
れ、
ら、
子、
と、
婿、
さ、
だ、
て、
書、
と、
じ、
入、
て、
そ、
せ

さうけふあまの光のたかまりさうをよみて
かんとて男よひて寺よけうと記すありと
せんとして負て山のわくよかきり男よひて
月と詠てふあり

我らふふあまの更級や姨於山よてり月と
とよきて山へゆきてむしてゆりさう

今中君のい都きて見ら月をれたむふさ
がこられいら姨於山の月とひて記のら

月とて祖もんをさくさまぬと於山の簾を
止の詞よなふまんとうよめて姨於山とらり中君

乃句文よ於られさうとよの山よさすう
さあひひさうらうづらてんらも姨於山の月を
かへー 弄同

月とららつみゆるものよ 實枝云樂天鵝肉詩

莫對月明思佳事 損君顏色減君年

わくや娘の物語よわくや娘月の白白出さうとん
常よりも物さひさうさ海まり或人月此やん
かへらむと割一たれやとすれい人
も月とんそいひみく泣けく又獨月見
はとむとらふふ小町集云中絶さう男の悪

小町集 十五

ひやくれきてんは月のみつと暮るるよとて
寝んそは惜うれれやとよのこに涙のせむら男
らむらうのよとつよきぬぬとて

獨ねの侍きつ起き居いつ月と夜とらみぞよ

まのらぎ一あつとあつら申るるおありぬ物

そなど 師寵愛のあまり つ甚こきら必あつらあふ

かのと也 か夫婦のあ分のこあつら君臣のからい

ち朋友のあみみあつらつら世からりあつら

盛衰の理と也

秋の夜をれとあつら

花亭

長一もさひとくぬ昔より整今これ秋の夜を

け世のみ一あつら命まらまもしきい

あつらぬ命まられねづら憂うれとまげへ

れあつらぬよもあつらぬこれ

あつらぬよもあつらぬこれ

あつらぬよもあつらぬこれ

あつらぬよもあつらぬこれ

あつらぬよもあつらぬこれ

あつらぬよもあつらぬこれ

不審抄出云春交山位よつきけりて中頃の喜交

よむまよと今この世の心とくまぬらしてわが
位よつきのぬらぬ中庭どふのこゝろをわが
あらぬや

命のこゝろをわが

古今
まごころを今も命あつて後世まで
命のこゝろをわが

後撰十又新「云志聖の亭跡より後」くらん
の下にみらとつとみゆり大伴黒直よりこま
まきのみらよんをつとみゆりしたるまきり
らと車より馬をよ物りつとみゆりその裳の腰

子事付てみるよとくりゆり

何せんへたのみらめとさひん沖つむ藤とわが
けりよ裳唐衣とよあつと刑とす

田ら〜のひく聲よおの後の〜

何事
田ら此啼つらけよ思ふ言ぬとさへ山の後の
延中をつりすら〜にらるる也

け
急流てわがとのとまけへぬめ枕の下に延中が
見〜〜〜とさ〜〜〜
およちねと白交み合せん〜の時々
よ〜〜〜あつ〜

らうと蓋へくくりぬひーりとな今白文也ひ
かーぬへり

五位十人いと重かきこの唐衣裳の腰も皆けらめ
ほろへー

李鄴王記天曆二年十一月廿二日丁卯夜調右
然柁坊内家娶云中女廿四日夜更漸深向右相
府亭所住之東南對廂東頭西向設座以朱臺六
基及銀器辨饌少臺一以以樣器辨饌菓等安座
右其西頭南北對設客座主公傳侍女告備饌由
即出就座并衛督師尹卿右衛門督師氏朝臣相

次加座以折敷設饌尤少將藤原朝臣伊尹以盞
酒安臺酒巡兩三行即入簾中侍女以下盃餅安
苜蓋羞之丰公率客卿起就列處命飲深賜陪後
者禄五位三人白單細長各二領袴一具六位有
官散位四人各同細長二領無官三人白絹各一
足召繼以下錢二方

今業女の装束はる幸代裳唐衣等也細長ハ貴
女着之もの也故子かよきとより也三重切子の
の唐衣ハ中儀ありとよみや腰ハ小腰引腰也
或ハ白く或ハ地摺或ハ村濃等有著異也

一禪云唐衣の色も裳も髪も髪もにあり又滋物シキモノの貴タカラ深平フカヘイ滄ソウの次ツギ也故ユヘもあがめありと云り

わつぎと云り

西宮抄院宮ニシノミヤノシヨウ御事ミコトコト中ナカ御隨身ミコトノミナト

勤夜行チンヤコウ召継メカスネ奏時ソウジ今業親王家イマノノサネノミヤ子コ又有マタアル召継メカスネ

式部卿重明親王嫁ウケノミヤノメカスネ聚ユ之時ノトキ召継メカスネ以下以下鉞ツバキ二百ニヒヤクと

禄ロク子コ抄シヨウよりより記キ子コみみししりり自家ミヅカミのノ所トコロも

是コノ子コ准ノルミへへ又マタ知チ是コノ院ノのノ禪ゼン園エン院ノのノ猶ナカ子コとトて

召継メカスネと具ツクせせりりももありあり也ナリと云りと云り御ミコト所トコロのノ

今人イマノヒトをを是コノ

仍ナラシ云イハ院ノのノ召継メカスネと親王ミコノミヤ家ノへへととてて召継メカスネ

あくら守アクラモリ人ヒトのノあゆアユとと園エン川ノの

汗アセ流ナリはくハクもも人ヒトのノあゆアユとと園エン川ノのノたゆタユららああととぞぞ也ナリ

けけはは親オヤとといいははももああららううとと云イハららうう

人ヒトのノ親オヤららのノ園エン川ノのノあゆアユとと親オヤ王ノミヤ家ノへへととてて召継メカスネ

ああのノあゆアユららのノあゆアユとと云イハららううとと云イハららうう

仍ナラシ云イハええ云イハいい佛ブツ事コトとと沙サ汰タイととららううとと云イハららうう

召メカスネ継メカスネららのノあゆアユとと云イハららううとと云イハららうう

召メカスネ継メカスネららのノあゆアユとと云イハららううとと云イハららうう

へへとと云イハららうう

あゆアユととのノあゆアユとと云イハららううとと云イハららうう

仍るまよ申君のみよあらのみあまらうまらぶ
まらハまハ怒りなり一多あまらうまら三年の甲い
一あまのらあまらまらあて申君へのらまらハ
まの年あまら一つあまハあまのらあまらあ
申君への我らあまらあまらあまらあまらあ
まらあまらあまらあまらあまらあまらあ

あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ

あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ

あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ

あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ
あまらあまらあまらあまらあまらあまらあ

分と道と守る也

大論曰哀哉衆生常為五欲中情之所欲一取惱而欲求之不已此五欲者得之轉劇如火灸瘡五欲無益如狗齧骨五欲增爭如鳥競肉五欲燒人如逆風執炬五欲害人如踐惡蛇五欲無實如夢一所得五欲不久假借須臾世人愚惑貪著五欲至死不捨為之後世受無量苦

きくくぬらなりや

是も蓮の我とらう妄念の

まじまじとさひくせら初也

く消せありと

憂あがく消せぬ物もさうく山一匹水の泡

かの人の山くう香のくくくくくくく

蓮の悪ひ入ぬひーのく双紙刺りありり

けろくあこれぬらぬく曝せり實徳るさそ

も人の妻よ近付りほよさむり斜かのれり

魚のよぶがこまへー小過くもも理

とまぐる罪い大也

あとのかよめくもぬれぬりけぬれいんくく

師まの蓮よぬれとえあぐひぬれぬらま

らぬんぬくくくくくくくくく

天の君、猶ありや

我こそは此よりあは

人馴ば我こそ先き急あ難向とも何ったのまん

けすいさよんがひつらして別の人を馴あひ

うらやまへこたひきあへりあつらのもよとあへ

ちよべーやとあへてをひくへて

白文と兼と並向より申と申君よらとあへ

り曲事やと兼の心くへり給よけを急初

らうくへてあへきとあへてあへてあへ

らうくへてあへ後悔してもあへてあへ

人々教へり

結ひらら装りしむら下細とて一筋よこへてあへ

仍覚え裳のり腰とありと向い白文と申君

装りのちこれとより下向い白文の急君へらうひ

給よりやとてけしとあへてあへてあへ

のあま申君とてけしとあへてあへ

あらしん 掲子

まびききりつらあまのせ知給え

大人への教也富貴よらうあらんいあへ

あらしん 掲子

ふん^{ふん}の^とめ^めび^びと^と第一^{第一}の^重職^職と^と

故^故み^みの^のに^に書^書す^すと^とも^もあ^あら^らず^ずに^にさ^さら^らす^すに^にあ^あら^らず^ず

所^所の^の表^表と^と 酒 ^酒 董^董の^の中^中君^君と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

見^見て^てら^らせ^せる^る世^世中^中の^のい^いづ^づれ^れも^もあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

付^付け^けら^られ^れる^る業^業花^花と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

一^一と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

是^是皆^皆世^世人^人の^のと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

何^何と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

是^是董^董の^の中^中君^君と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

れ^れい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

一^一と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

あり^{あり}て^て大^大多^多と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

家^家と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

論^論後^後曰^曰未^未見^見好^好德^德如^如好^好色^色者^者 ^徳徳^徳と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

乃^乃道^道と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

け^けと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

河 ^河 水^水の^のと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

と^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

く^くも^も世^世は^はよ^よか^から^らず^ずと^とい^いふ^ふに^にあ^あら^らず^ず

流^流る^るに^にあ^あら^らず^ず

河 志の記に及るが如く世より世つとて三ありて歌の終
よしのの里 紀伊國牟婁郡にあり川其滝也

とあり

弄 志保ておとぼあらんがつるまづこころんをせの
じりーがゆらんこころもつらり。繪みもつら

白氏文集曰香爐峯北有寺号遺愛寺伴寺者唐

高宗皇帝有寵愛王子至七歲忽薨不堪哀傷建

立堂舍王子形安置其寺草堂記

畫圖事漢武帝初喪李夫人李夫人甘泉殿裏令

寫真丹青畫出竟何益不言不笑愁殺君云

丹青トハ繪ヲモ繪ノ具ヲモ云。

テ多コクノコトハモラサナリ 歌事木像武帝

以董仲君李夫人自作以温石温石トハヤハラ

カナル石也

みづゝ川を流らするらんこころもさひやうい

わくゆき

河草

志せどいも流川ませりみそれ林いけとも成もろら

仍覚云いも流川よこそ人形とゆりもく人あどと

すまれ佛道のかこまひま林をといまきくるまづ

ろとりの地也

あぶらりじろ繪師もこそあど

漢元帝時單于來乞和主元帝詔令畫工毛延壽
 圖三千女良以醜為与胡人官女以金玉賂畫工
 昭君以三千弟一不賂依圖像惡醜与胡人
 弄 王昭君がとく繪よりきたりてあしくりてい
 いふと也 王の字を略してとく昭君と計
 つつ昭の字と誤してとく也
 そのらくもあつとていふらんまの叶へき
 宴妓云不言不笑かたらへ甲斐あつとへ
 かつらと申君もあつと含ませつと詞也
 五ふまつととれつとあつと

河 世とつとあつとにものありつとにづねま
 河 陳鴻長恨歌傳曰帝求四虛上下東極絶天海
 蓬壺見最高仙山上多樓閣西廂下有洞戸東嚮
 闔其門署曰玉妃大真院
 長恨歌の方士がよの碧落下へ黄泉まで尋り
 蓬も大君の似つと人あつと海中へも尋らん
 人のうへあつと物とあつとありつと此の物と
 仍覚ん云申君のよつと大君のあつと物と
 いとつとあつと蓬へもつとあつとびき

いざりしと

あがれなくもつとてらんこそはらあむちらのあま
白文の中君へくれくまると物といひて大臣
のくれはひい謀りて董のあむちらと
例のこれ忘日の経佛のよりまじ

大君の一同志也角経巻董世この十一月は
君これあむちら早蕨巻が董の世なればい
同志へ早蕨巻のより也

昔かといひてかむいといひてあまこの年とい
まけ 親善珠玉国位の時人の子まてかりし

ろろ子継母乃ぬまろろこれまむその親かとい
顔よけて終り佛道に入ら也経文あり
仍免云まは法藏比丘物語とされし出宗
くあす家のくあかの餘執と持て佛道に入
しはへと

法藏比丘物語云東城國のあつ月藏轉輪聖
王の皇子善生太子とやあら西城國の善心王の
姫宮子阿肉まんと申すと聞及ひ二年三月め
まけつきてまむちらぬ人のまきいせられぬ
乃あむちらへといひて密通しはり善心

王きつしめ一姫宮も善生太子も殺しりしき
 くと宣下せらるされせ武士がまけりてなを
 けりり一ふも食として阿闍婆人とやいひ
 男子二人ともうけてけし七歳の時東城國
 へ入り遊の人多百人とつれ来り道とてと
 下六年あまりとへ一ふ遊りて阿闍婆人の
 二人の子とつれて東城國へと出立道とて
 麻野苑のめりりて母の死法へり火葬り
 白骨と二人の子れらびり東城國へとゆりて
 よ父の善生太子の遊りありゆり遊り二人

の皇子と國とゆづりて善生太子の出家一法
 比丘と名とつき宮十八和とて法阿闍婆人の
 道の空りて醫師をきとるみ十二の和とて
 薬師如来とるり東方淨瑠璃世界よまます
 夫婦の和合して六十の大和也二人のまを
 觀音勢至とありつれゆり
 け物語の實我い東城國の物と生とる言也月
 藏と法也轉輪聖王と陽り東方の陰陽
 のせとる子と善生と号と西城國の物と滅す
 方也善心王とい過去大通智勝仏と云け仏よ

十六王子あり才一と阿闍伽と云阿闍伽梵諸
 いま不動如来名勳尊と云し四月十九日某師
 七年忌阿闍伽是乃二一神二名是才十六の
 王子と釋迦と東城の皇子西城へ移て二十子と對
 となりと東方の春は万物と出し西方の秋は万
 物と実と方るれは是を念と一妻子と卷とる
 とい万人妻子の為は昔患とるは論の道の程
 二年三月と云へ東方卯乃方より出て辰己午未
 申酉の六日が酉よりよびと阿闍伽夫人の業師より
 始ふと一神二名と以て云又三十五日と三十三

年の仏事同功德と云へ三十五日は地獄三十三
 へ不動如来と一神の大日の変化するれ也
 以上秘傳
 あまみのとらせ 暦博士三十三代推古天皇十
 二年甲子正月戊午始開暦日と云
 二事根源抄云武朝子暦の始まりより三十代欽明
 天皇十一年より百濟の博士せりちと云
 こぼよ 至徳記云木蜘蛛の糸也蜘蛛の糸也
 何と云やうにいふは葛也鏡葛と云
 蜘蛛竹渝切班身小強
 宿り本と云ひ世といま乃りとの縁縁といふはびりし

仍覺云熱して蒸い一せとよりあるくはひ給ま
ま東坡が音せ如寄身といふかゝくはひ給ま
さしめざるは也

ふ里子抱一ゆりていふ嶺の烟旁にまゐりゆりつら
何古 宿のふ夜の烟旁はどのいひつせせぬ世中は
何古 仍覺云いふの字面白一都てて入時給ま
ふ里いふは也

あはれに若がの中めいめんよりい
何古 いらん若がの中よまもいふせぬはとのまこと
宿枝云は文の細妙也別のふと求んよりも也何

時もくべきのふはてしき寺にる一給よはへんとい
尾花の抽りうといはてまもい出てまのい

何古 杖の形はまの袂は花露はひそまの袂と尾花
はたぬ物よりい志の露まの袂の露まのい

美 志の露は説あり一説穂よぬと志の露といふ
説無し露也穂よぬはきつらむいぬと云い
宿枝云蒸の折かやうよ又かやういぬれい中
の下のふまの蒸とまのき路んと推して也
志の露は穂よぬと云い志の露穂よぬと
らめりやい一説別ありて穂よ

出ぬと云ふの花いあ

はらゆひらのとて

大いこの花ゆひらのうけにたきての世も

花の中よひとくすど花のそ

不是花中偏愛氣 此花開後更無花 元稹

コノ詩元稹が亡灵出テ後ノ字ニ非ス盡ノ字也ト

西宮元大臣へ告タルト也

あけりのみこのけ花めくふ夕ぞう 古天人乃

けりて琵琶のよとくふい

西宮の元大臣のゆきとみこと親王と争也た厨い

親王と争ふ孫女を子とるゆいよみこと争ふ家

けりて

西宮元大臣庭前靈物降居樹上詠前遊小兒詠

此詩教作者之本意盡字兼請琵琶授秘手曲小

兒醒唐唐唐武靈也 授上元石

天人のけりて琵琶のよとくふいよみ孫女の

物候あり庵懸武が灵のゆき

ふそ濃くもけりめ昔とてふそんりそいなるけり

ふそ 仍覚云面白詞是道と説し如け也高時

ふそ濃くとも傳ふるふい濃くもけりす

らんしきでうまのきありせ

弄 琵琶の菱鐘調のうきありせとよみあり

伊勢海へ律のうき盤渉調も律也平調も律也

魚りうさうもや平調へ律也

いせのうき 催馬樂律 伊勢海

伊勢の海乃清き満は蛭いし神馬藻也摘ん

貝也摘ん玉也拾ん

蛭いし汐の于はう回也

蛭へき受領せりしりくよつうまのり

仍覚云朝廷のり何りも一りとありしり國

乃奇よ作ていとるませうら定まる法也

二月の朝日比るりものうらりも 直物と事

河 縣石成系常除目以後執筆直物と申也或

除目以後兩三月経てもある也先度除目参着

り等とひくと故に直物と云也

至徳記よ云執筆の違うらりすと事ととる也

石の記いよのたそわらうらりか辭し給へる也

仍覚云紅梅のり也竹門卷の昇進も藤太納云

尤も持けらる石太成給とあり安もて紅

梅石太成のたえ拍と辭し給へ給へる也意給太納云

まゝ右大御りけしり

且御勸修寺^御より大抵あむられ大御りいふ成家

也國白よりると攝家といひ大御り成と清光と

り

わたりけしりのまゝ

孫はあむといふ人

まゝ主人南階よりりりり孫揖讓の作法

あり也 仍ども今の世も孫賀禁中より也

六位^{若人}の中極隔南庭より下て孫あり

孫評 名目抄

つきの人よりりりりりの事よりりりりり

大将初任の御祭の垣下より親玉の例あり

西宮抄大将初任^花夏除自畢大臣以下若議所座

大将暫留於射場殿令奏慶拜舞畢^{此間可奏}渡

南階前退出之間近衛等候庭際忽然發物聲撤

箆放歌于時率公卿及次將以下出後宣政門向

里第^{上卿着外座}少將以上垣下公卿各着座^{次將在內}先

近衛以上六位官人於庭前歌舞訖着庭中座次

公卿及少將等座立机相次立机食床於庭中給

六位以下肴物盃酌無算之後被物緋等各有差

但新任大将若在里第者引可到其家飲賭弓勝

方饗准之可知此日以親王為垣下蓋故實耳勘
物大將上臈不來有親王大將着中將上

今業大將初任の時その中かおつ下と流
郷のよりとけて禄と給ふは白土郷のみと饗
所へ流し下りていさやと給ふ中君よりいせ
ておがしめたるよし是

仍見え大將の初任に中少將お盛よむて招
る是

あんのみとらわんざらめ 垣下の郷といふ
流し請伴すと垣下といふはかひりりし

と郷へちねりり 与首の郷へむらざらめ 親王へ
むらざらめ時大將の着所かむらざらめりり白土垣

下の座子流し下りて
屯食六十具碁子の後よりらん 梳飯

李部王記天曆 六十二年 四年七月七日是夕藤女
所有産養事産婦饌衝重十六合破子食七荷長

食八具碁手錢二万贈物児衣襦袢各五重納支
依水宮二合 有白使大藏丞藤原守忠傳言云物

雖鄙陋今宮所贈蓋可有意報云息問備至恐喜
深况兼宮息命竹忠無極即纏頭白細長一重袴

下具守忠令道出門追傳報賜禄

仍免云恭仁仙家の用りありのされい壽令長遠の心と
表してうたしむ賭物い後也

少くまのせけり 粉熟

粉熟い五穀と五色よりごりて粉より餅を

してゆでる甘葛とりけてあねあせてわを此竹

の筒として其中よりごりて押入てとろりあてつ

きせしてそ婆双六の調度のごくまき

うすの物緒肉内のよ水のあつらひ返らう人の御

それわみきまらせ給それおつぎきて粉熟

まのまのり

仍免云點心也節會の時も有し饅饨といふもの

数也三至徳記云染のやうなる食物也一切の

祝の時も用らるる是

わくまのりの世よと人のやうに年とりつそがせ

はくろとむいすくまやありん

嵯峨五十皇女潔通忠仁公宇多皇女源

朝臣傾子通貞信公醍醐皇女勤子内親王

配右大臣師輔公同皇女雅子内親王康子内親

王共配師輔公同皇女靖子内親王配大納言藤

原師氏卿生一女子韶子内親王配大納言源清
蔭卿後配河内守橘惟風村上六十代皇女保子内
親王配貞信公盛子内親王配右大臣顯光公保子
内親王配入道大政大臣
兼家也自信公トハ非也

今案け等の例皆ハ脱屣の後或ハ崩御の後乃
人の妻ト成給ふ由テ一く在位の天子の以女以女不
ト配すりやハ婦也婦也嵯峨の皇女潔姫の外ハた
りし者也
漢朝漢朝も其例ありされと尚尚す
脱屣トヨムガ名目也院ノ帝ト成玉ヲ云帝ノ帝ノ聲

二十九ヲ尚トス

おつぎいやくやうやく

河古今
おつぎいやくやうやくありや女子女子等等はく

菽の花乃宴宴せり南のいいのみとあげたり
とそたり

西宮記云天曆六十二年四月十二日於飛香

舎藤有藤花宴以殿上御倚子立南有南

廂東一二三間卷簾無母前立四尺屏風二帖敷

信濃廣延中敷毯代立御倚子南簀子敷同延同

簀子中間以東敷畳云卿座當庇中戸南立五尺

障子其西有御酒具赤漆火爐一口有黑漆臺同
 机二前其上_レ有満心_レ懸_レ今_レ炸金銅_レ杖伴鳥入御酒
 銀御銚子一口加_レ土器_レ臺盤炭取當公卿南前庭
 敷紫端疊四枚其南敷二枚殿上人座仰掃部寮
 令_レ敷軒廊東小庭疊二行西面北上樂夜座也未
 尅御出召右大臣次諸卿次侍_レ着座_{北四位五位}
 供御膳具_注維時朝_レ率五位六位自南庭渡西
 昇置物御机一基立座西椽木作有木蘭地_レ綺敷
 物卧組等御折敷四枚立御机上_レ淺香折敷_レ沈裏
 以金_レ困之_レ朽葉色唐羅花文_レ綾敷物在心葉藤花

閑組等件組折敷各四加_レ牙象臺表紫檀裏_レ蕨芳
 有銀筋供膳折敷二枚以_レ椽木_レ御着生物干物_レ窪
 坏以銀作_レ土器_レ以_レ黄土_レ供_レ了陪膳退下_レ給_レ臣下_レ衝
 重供御酒_{銀蓋}維時朝_レ臣_レ供_レ給_レ臣下_レ義方朝_二獻
 盃_レ饅_レ給_レ臣下_レ大臣奏_レ聞_レ召_レ樂所_レ別當_レ中納言源朝
 臣_レ令_レ召_レ樂人_レ別當_レ仰_レ藏人_レ召_レ之_レ樂所_レ參_レ入_レ奏_レ調子_レ
 有_レ哥事_{立_レ文_レ臺}立置物御机置御硯紙_レ給_レ臣下_レ獻
 題_{維時}大臣奏_レ准_レ延長_{六_レ十_レ代}例_レ地下_レ人_レ一_レ兩_レ獻
 哥<sub>召_レ庭_レ燎_{月_レ光}獻_レ哥_レ伊_レ尹_レ取_レ文_レ臺_レ右_レ衛_レ門_レ佐_レ清_レ正
 講_レ之_レ尤_レ少_レ將_レ朝_レ成_レ藏_レ人_レ頭_レ雅_レ信_レ朝_レ臣_レ兼_レ燈_レ地_レ下_レ獻</sub>

哥者源循藤原兼家灌水有_リ時時方等_ヲ 誨哥_ヲ
 大臣取_テ御製召_ス公卿侍_臣堪_ス者奏_ス系竹_ヲ大臣納_メ
 言渡_リ兩大_臣取_テ御杖源朝_臣取_テ御琴譜進_ル御前奏_ス
 云延喜御時御琴譜云源朝_臣等稱_テ物名授_テ頭藏_人
 人置_キ御机琴於袋彈御兼家被_テ聽昇殿_ニ大臣賜_リ禄_ヲ
 以_テ女裝束源氏_小大臣給_テ御衣一襲又以_テ女裝束_ヲ
 給_テ之_ヲ

夜の花のりよぬ上人のどいり

天曆三年南庭藤花下賜_テ迎_ル座_ヲ

らうらうらんひんくまぐくまのん

後凉殿

天曆三年と軒廊東設樂所座_ヲ

きんのか二卷みえろうの枝よ付らとりとりと

らうらう

薫り帝へまつせうと夕香たおし奏_ス

はよ

天曆三年右大臣捧_テ先皇賜_テ勤子内親王_ヲ箏譜_ヲ

卷_ヲ左衛門督執赤笛_一管_ヲ 左兵衛督將

螺_ノ箏_一面_ヲ 奏_ス名_ヲ而_テ獻_ス之_ヲ

延喜帝の皇女勤子内親王へ九條右丞相の室_ヲ

まりはよけ版の娘天曆三年村と帝へまつ

夜壺女御安子と号と勅子内親王に延長帝より
筆の譜と申て御入りしと娘の安子よつこより
安子の夜壺中宮と申村と帝へまわり今迄
と云いて安子申さるる

三つ子の御器

銀揚器 或薬器 親行記

至徳記云陰しりと朱器といひ白木といふ揚器と

ついで

天曆三年沉香折敷四枚紫檀臺以土器様銀器
供御肴粉熟有赤漆火爐銀銚子

るつとの御器づき け物御より後の御器づき

寛治七十三 五年万壽六十八 元年天盃用瑠璃

御盃

大御子ゆつり御器 仍云々も常法宮も當今

の御器を御つづきし御器と云々
乃ゆつり御器と親王と云々
盃と御器例花多にあり

賜天盃例天曆六十二 七年十月廿八日菊合式

都御親王重明給天盃寛弘六十六 四年四月廿

七日密宴中務卿具平親王給天盃以上賜永延

六十 二年三月廿五日攝政六十賀御堂殿給天
六代 盃永祿六十元年二月十六日朝覲行幸御堂殿
 給天盃寬弘同代三年三月四日行幸御堂殿時
 天大 給天盃同五年十二月廿日御堂殿給天盃
以上給執 今案此後萬壽六十八後一條元年宇治殿嘉
政長例也 祿八十五三年京極殿給上皇天盃寬喜八十三
後堀川 年光明峯寺攝政永德百代後元年室町弟行幸
 鹿苑院大相國等給之也為後學以
花 小右記云永延六十六二年三月廿五日攝政六
 十賀天大臣起座献御盃右大臣取御銚子主上

給御盃於攝政此間被仰壽言或云萬歲攝政又
 有答奏可尋記攝政下庭中拜舞

以盃さげてとやの給るらんづらひ

至德記云唯稱子歎上より給あると合点一えけ

ぶよと唯しりよ也

聽言云うづらの物終よとつら洞ありそれい

物さすまのしりよらん人の足音のききとめきれよと

いづらん也今蓋天盃とつら給る所なりはつれと

割するん歎

系 清少納言枕双紙上よ書けりとのこにかのまろ

是者たりきりひまにきくといふ夢中曲

きく人へはつりてありてふきりしは

仍先云天盃と直まへのま守別の土器は御凝濁

とつつてのじそ別の土器とていへといふ

是時^{これ}の耐子定^{なひま}より礼儀也天盃とい懐中す

也

ふと

^舞踊い

たをたあてたをたとい

按察の大納言いまれとていふめをいんと

け大納言誰かありと尋ねり実枝云江梅の

かきふる人へ右大臣とていふまをいんといふ

その宿とすのよ

うらけ世とてけり句らん花をい

花^{はな}香^か舎^やの藤^{ふじ}宴^{えん}子^こ延^{えん}喜^き御^ご事^じ

つていふ人へいふれ可^べとてけり句らん花をい

藤子万歳藤の号あり

あつてあつてあつていふ意のまにけり花のきり

拾遺集十六子延喜の時散壺の藤花宴せ

はひららる敵とのよのこをいふつういふららる

藤原國章

藤原言乃ららる意乃をいふのまがめや

あがはしやうし

催馬樂一品

安名尊

^{一匹}あまたうと今日乃さうとさやうもまされ

^{二匹}いももくやありけんさ白のさし

^{三匹}あられさうやと白のさうとさ

あなとん嘆さる勢也三匹のうとさ 張外也人と

いんも調也

例の朽木のり

前子辨尼り

荒い朽木のりくと有りあはしむる程のり

あまのりかへり 常陸守り内の者矢と今尻籠

と負もや

車いたくわくあへくさう

^再女の車よりわくま

車のま板より打板とりよ物とまへりわくま

泉川の舟より

河津川と云也日本紀よ桃川

とありとつと五巻通なり也十代崇神天皇發兵

川と申より挑戦あり一故也

造船 文選弟二

やめ川さうさう

よは浮舟の供乃女たの切よ

いんもへ住居くさくさよわくまれと黎東のあはし

く純ちまわさくとくさうさういもあはし

あがはしやうし

夕ぐれいせきよは啼るの鳥のふよんえつとあはし

